

技術の修得に限りなし

武市洋美

桶谷式乳房管理法研修センター東京校

中北さん、ご紹介ありがとうございます。「一日も早く若い助産婦が開業できるように」としめくられた中北さんの思いは私の願いでもあります。

家庭訪問で開業

私は平成元年、大阪の桶谷式乳房管理法研修センターを卒業し、いったん日赤医療センターにもどって病棟勤務をしながら、週1回母乳外来を行っていましたが、開業へのあこがれがつのり、平成3年退職して、母乳相談室開設の準備のために家庭訪問を始めました。開業届を保健所に持って行ったとき、「食べていけるのですか」と、生活の心配までしていただいたことを思い出します。

家に助産婦を呼ぶことができるのは、東京の田園調布あたりの金持ちか——などと想像していたところが、ふたをあけてみたら、ほとんどが未熟児と障害児、とくに口唇口蓋裂児を持つ親からの依頼でした。小さく生まれた子どもに、1滴でも多く母乳を飲ませたいと冷凍母乳を病院に運んだのに、赤ちゃんが退院して、さあ母乳を飲ませようと思ったとたん、のけぞり、そっくり返って泣き叫び、吸いついてくれず、そのうちに乳腺炎になったり、出なくなってしまったりします。

ただでさえ吸啜力が弱く、哺乳瓶に慣れてしまった児を、直接お母さんの乳頭に吸い付かせるのは、なかなか大変なものです。しかし直接飲むようになったときのお母さんの喜びは、たとえようもなく、こちらも、よかった、よかったと胸をなでおろす一瞬でもあります。未熟児とお母さんの間にあったなんとなくぎくしゃくしたものが、授乳するたびに埋められていくのがわかりました。

口唇口蓋裂児の母乳哺育は、口唇裂に関しては問題なく授乳できますが、口蓋裂は長い授乳期間中、手技による乳房管理をしていかないと分泌不足をきたしてきます。「口友会」の調査では、口唇口蓋裂児の母乳栄養率は2%程度とのこと。どんな状態で生まれて来た子どもにも直接母乳を飲ませたいという母親の願いに専門家の私たちが応えているかどうか、今後私たち母乳育児援助に携わるものの課題であると思っています。

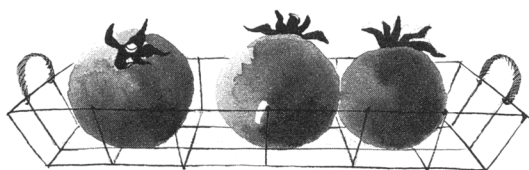
開業前の準備として始めた家庭訪問でしたが、これは私にとって本当によい経験になりました。行政からの依頼ではないだけに、初めてのお家で、20分間乳房マッサージをして「はい7千円いただきます」と言うには、必ずそれに見合った技術を提供しなければならず、満足いく結果が得られなければ、二度と依頼は来ないという、勤務助産婦をしていたころとは異なる厳しさがありました。

桶谷研修センターの仕事

そうこうしているうちに1年たち、東京・杉並区に桶谷式乳房管理法研修センター東京校が開校し、私は教務として就職しました。

平成4年の第1期生から、今年3月に卒業した第3期生まで計29名が巣立って行きました。入学資格は助産婦の実務経験3年以上としています。実際に入学してくる研修生は、20歳代後半から40歳代まで。背景はさまざまですが、桶谷式乳房管理法を目指した動機はほぼ共通しています。

母乳が出ない、乳房が痛い、子どもが乳頭に吸い付けないなどのトラブルに陥った母と子を中心に、自分の無力さを思い知らされて、より具体的



な援助技術を身につけたいと思った、または、自らの育児体験を通じて母乳哺育の重要性に目覚めたというものです。ちょうど助産婦として油のりはじめた年代といいましょうか、なにごとにでも一途に前向きに取り組もうとする人がほとんどで、たのもしいかぎりです。

卒業後は開業を目指すか、病院に戻るかに別れますが、せっかく技術を身につけて病院にもどっても、母乳外来がない、つくろうとしても病院側の理解が得られないなど、能力を生かせないで夜勤に追われてしまう人があるのが残念です。入院中の指導がもっとなされていたら——というケースが多く、お母さんたちからの要望も高いいま、知識と技術を持った助産婦がいつでも対応できるような、母乳外来が各施設にあるべきだと思います。

それにしても技術の伝達ということはなんと困難なことでしょうか。桶谷先生は、よく「3年たったら少しわかることも出てくる。10年たったらああそうかというようになる」とおっしゃっていましたが、見えないものを伝えるということ、そのうえに伝授するものとされるものとの感性の差など、習う側の経験の“熟し”がなくては理解できないことも多いといったことを実感しています。

技術の修得には限りがなく、常に研鑽していなければ、すぐに我流になってしまい、そして技術の低下は、乳房・乳質・赤ちゃんの状態にあらわれます。桶谷先生はじめ、先輩のだれもが、一生研鑽であるといわれます。私も、研修センターの教務という仕事は重荷ですが、研修生たちの情熱に引きずられ、後押しされてなんとか務めています。

昼間・先生、夜・学生の生活

さて今年3月、桶谷研修センター東京校3期生の卒業と同時に、私も青山学院大学の二部を卒業しました。現在多くの大学が、社会人を受け入れており、クラスに2～3人は同年代と思われる社会人がいます。放課後わたしを含むオバサン女子大生は、ビールを飲みつつ、再びの青春を謳歌しておりました。

体育で水泳の集中授業を選択し、張り切ってプールサイドに出てみたら、まわりは19、20歳のハイレグギャルばかり。年齢を意識したのはそのときくらいでしょうか。助産婦の仕事を看護以外の分野から見てみたいと思って入った大学でしたが、想像以上に広い世界を知ることができ、毎日が刺激的で、楽しませてもらいました。

そして西洋教育史ゼミでのこと、助産婦教育の変遷を取り上げ、発表したところ、終わったとたん男子学生が、「あのう、助産婦ってなんですか」「エッ!」。この学生は、初めて助産婦を見たのでしょう。それにしても「助産婦ってなんなのか」男子学生に説明をしながら、この質問は助産婦自身にむけられたものでもあると強く意識したのでした。

さて、桶谷研修センター東京校は、今年4月に中野区に引っ越し、教室も実習場の母乳相談室も広く、新しくなりました。現在は新研修生を受け入れる準備を行なっています。どんな志に燃えた研修生が来るのか、本当に楽しみです。

次は、看護学校、助産婦学校の同期で、現在母校の高山赤十字看護専門学校で教鞭を取っている田中みどりさんにバトンを渡したいと思います。